



カラスが教えてくれること～多様な側面から対象を捉える～

副校長 沖山 宗弘

皆さんはカラスという鳥をどのように見ているでしょうか？本校には「ねりまの名木」に指定されている、校舎の3階を優に超える高さの立派なクスノキが正門の脇にあります。実はこの木がカラスの巣作りにとっても最適となっているようです。そのため、5～6月にかけてはカラスも子育ての時期で相当に警戒しているようで攻撃性が強く、安全を守る上での悩みの種となっています。さらに、一般的にもとても大柄で真っ黒な体、けたたましく鳴き、ごみを散らかすなどマイナスの側面をあげたらきりがなく、あまり良い印象をもてる鳥ではないかと思えます。

ところで、娘が3年生の時に、夏休みの読書感想文に適した本が無いか書店で探していると「カラスのいいぶん～人と生きることをえらんだ鳥～」という課題図書を見付けました。娘は鳥が比較的好きなこともあり読んでみることにしました。カラスに嫌な思いをさせられた著者がカラスに仕返しをしてやろうとカラスの行動パターンを丁寧に観察していくうちに、カラスを面白い対象として見るように変わっていき、よく庭に来るカラスとコミュニケーションを取るまでになったというのが大まかな内容です。この本を読んでいくと実はカラスが何の理由もなしに人に迷惑をかけているわけではないことがよく分かります。カラスも種として存在していくためには生きるために食住の環境を整えねばならず、8歳児相当はあると言われる知能をフル活用し、山での生活から人里での生活に適応してきたのです。食べ物を貯蔵したり、遊びをしたりと生活の中から生きる術を磨いていくあたりも人間顔負けであることが紹介されています。また、古くは日本神話で3本足のヤタガラスが神様の使いとして登場し、日本サッカー協会のシンボルマークとして使われ、勝利に導く守り神として崇められていることも特筆に値します。私自身も、カラスは決して黒一色ではなく構造色によって多様な色を持ち合わせていることや、他の鳥ではなかなか難しい2種類の歩行方法を使い分けていることなども見付け、好印象を与えることが多々ある鳥であることに改めて気付かされました。

さて、ここまでなぜカラスの話をしてきたかですが、私たちがカラスを見るように他人を見ていないかということについて考えていただきたかったからです。人は自分や周囲の状況が悪くなるとかく相手や世の中という自分と距離のあるものをマイナスに見て、何とか心の安定を図ろうとしがちです。特に自分自身が疲れていたり余裕のない状況に置かれたりするとなおさらです。カラスは黒一色であると決めつけるように、悪い行動を起こすと悪い人だと決めつけてしまうというのはあまりに早計です。悪いのは行動であって人そのものではありません。本来多様な輝きをもっている人であるのに、その日の周囲や心身の状態が芳しくなく黒一色にしか見えない行動を取ってしまったにすぎないのです。何か問題に当たったときには、物事を俯瞰して見ていただき、関係した全ての方の思いを尊重した対応を願うとともに、私たち教育に携わる者も多角的に事象を見るように戒めたいと思えます。

また、5月になると、子供たちは自分に自信がない、何かを進めるのが面倒だという気持ちになりがちですが、そんな時こそカラスの話です。決して自分は黒一色ではなく、多くの可能性を秘めている、そして自分は頼られる存在であることを自覚して欲しいです。開一小では、個の考えや理解力を尊重して教育活動を行えるよう教職員一丸となって取組を進めてまいります。開一小祭りなど、子供たちが主体となって考える行事も控えているので、良いアイデアをたくさん出し合っていけるよう働きかけていきます。

カラスに限らず物事を一つの側面でしか見ないと、本質が見えてこないことは多々あるかと思えます。今後も教職員一同、物事を多面的に捉えて教育活動に当たっていけるよう努力していきます。

たくさん持ち上げておいて、カラスには申し訳ないのですが、子供たちや来校される方々、教職員の安全が第一ですので、本校のクスノキやメタセコイアに巣を作らないように見守り、他の場所で子育てに励んでいただけるよう、関係各所と協力し対応していきたいと思えます。

